法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

セドラチェク×グレーバー『改革か革命か』における資本主義批判の視座

新井田, 智幸 / NIIDA, Tomoyuki

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
89
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1079
(終了ページ / End Page)
1099
(発行年 / Year)
2022-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025176

セドラチェク×グレーバー『改革か革命か』における資本主義批判の視座[1)]

新井田　智　幸

はじめに

本稿では，異端の経済学者セドラチェク（Tomas Sedlacek, 1977-）と，アナーキスト文化人類学者グレーバー（David Graeber, 1961-2020）の対談を収録した『改革か革命か』（2020）を取り上げ，彼らの資本主義批判とオルタナティヴ社会像について検討する。セドラチェクは神話や宗教に見られる規範の分析を通じて，ホモエコノミクスを前提とした現代の主流派経済学を批判する，独特の批判的経済学者である。対して，グレーバーはオキュパイ・ウォール・ストリートでも中心的な役割を果たしたアナーキスト活動家であると同時に,『負債論』などの大著で知られる文化人類学者である。直接的には接点のない両者であるが，この対談では現代の資本主義システムの持続不可能性について問題意識が共有された上で，その捉え

1）本稿は，経済理論学会第69回大会（北星学園大学，2021年10月16, 17日）の第12分科会：「オルタナティブ社会への通路をめぐって―T. セドラチェク×D.グレーバー，D.ハーヴェイ，R.ボワイエの著書訳者による論点整理―」で，三崎和志氏（東京慈恵会医科大学）と行った共同報告のうち新井田が担当した内容についてまとめたものである。この分科会は，経済理論学会に常設の問題別分科会「オルタナティヴ社会」が企画したものである。会員が関心に応じて所属し，恒常的なメンバーシップをもちながら，継続的に研究企画を担うことができるような常設の問題別分科会の設置は，河村哲二先生が代表幹事を務められている期間に，先生のイニシアチブで進められた学会の組織改革であった。学会の将来的発展を見据えて，研究活動を活性化させるべくこのような取り組みに尽力された先生の功績を，ここに記して敬意を表したい。

方や変革のありうべき道筋などについて議論が交わされている。

両者が示した資本主義批判の議論の中心は，現代の市場が非人間的なシステムとなっていることである。経済が人間のためにあるのではなく，人間が経済あるいは市場のために生きるというような主客の逆転が起こっており，このシステムが人間らしくあることを困難にしている。この根底には合理性に基づく市場によって社会が運営されるべきとのイデオロギーがあり，負債や貨幣によって人間が数字化され，合理的計算の主体とされる個人が生み出されることで，このシステムが機能している。そして，主流の経済学はホモエコノミクスを基軸とした理論によって，このシステムの維持と再生産を行っている。このように，非人間的な市場に基づいて機能しているという点からの資本主義批判が彼らの特徴的な議論であり，そこにはそのシステムの一部となっている経済学への批判も含まれている。そして，そこから人間的な市場や経済というものをどのように展望できるのかという議論が交わされている。

本稿では，以下，セドラチェクとグレーバーの資本主義システム批判の紹介を行ったうえで，経済学批判と変革のイメージについて両者の共通点や違いについて検討する。

1．『改革か革命か』の概要紹介

(1) 対談企画の概要

本書はチェコのジャーナリストであるロマン・フルパティ（Roman Chlupaty）とセドラチェクがゲストを迎えて対談するシリーズ企画の一つである。本書ではグレーバーが迎えられ，フルパティを進行役にしてセドラチェクとの対談が行われた。対談は2013年に英語で行われ，チェコ語版が2013年，ドイツ語版が2016年に出版されている。

2013年という対談の時期を反映して，本書のプロローグはオキュパイ・

ウォール・ストリートの隆盛と衰退のエピソードから始まる。2008年の世界金融危機とその後始末は，危機をつくった金融機関だけが救われるという経済システムの不公正さをまざまざと見せつけ,「我々は99%だ」をスローガンにした2011年のオキュパイ運動を立ち上がらせることになった。グレーバーはその運動の立役者の一人である。オキュパイ運動は，運動のスタイルが斬新であることが注目され，影響が広まった一因ともなった。それは一般的な社会運動のように，政府に対して要求を突きつけるというものではなかった。彼らはウォール街の一角に集まり，そこを占拠して，議論をし生活をする空間を数か月間守り続けた。そこでは，参加者が様々な自主的グループを作って，集団生活に必要な仕事を分業し，集団の意思決定は直接民主主義的な全体集会で行われた。つまり,彼らは既存の制度（政府）に何かを要求するのではなく，まったく別の制度で成り立つ共同体を形成しようとしたのである。これは予示的政治[2)] とも呼ばれ，既存の制度の変革を追求するのではなく，将来に望む社会を運動のなかで先取りしてつくり出すという戦略である。これが一定の成功を収めたことは，既存の制度下で生活するよりも，こうした別の実験的な制度に期待をかける人々が既にそれだけいたことを意味する。

こうした状況を前提に，本書の対談は，資本主義という現行のシステムがどんな欠陥をもっているのか，そしてそれを変革するにはどのようにすべきか，どんな新たなシステムが可能なのかというテーマが中軸となっている。両者とも現行のシステムには批判的であり，持続不可能性を共に認めるが，その変革の道筋については見解を異にしている。グレーバーはオキュパイ運動への関わり方からも分かるように，別の制度をつくっていく

2）予示的政治（prefigurative politics）という言葉は1970年代から使われていたが，グレーバーはこの理念の実践を1999年の反WTO抗議行動に見いだした。「（この運動）は全面的に「直接行動」の原理に基づきながら，いわゆる―新しい形式の社会性を「現在」において創出することで，すでに自由であるかのように振る舞うことを目指す―「予示的政治」に邁進するアナーキズムだった。」（Graeber［2004］訳書「まだ見ぬ日本の読者へ　自伝風序文」19頁）

ことへの可能性を比較的楽観的に考えており，持続不能な資本主義は崩壊させて，新しいシステムをつくればよいという立場である。一方，セドラチェクは，政府のエコノミストを務めている立場もあってか，資本主義そのものが崩壊することには危機感をもっている。修正資本主義を自認するように，彼は資本主義をもっとまともなシステムにするという方向で変革を訴える。この「改革」の姿勢が，グレーバーのラディカルさに見られる「革命」の姿勢と対比されるのが，本書の主題である。とはいえ，両者の意見が広範に対立しているわけではない。いずれも資本主義のシステムの問題を指摘し，片や経済学の問題としてそれを捉え，片や人類学的な視点からそれに切り込むことで，互いの視点を補い合っている。軽妙なやりとりを通じて，独特の批判的視点が次々と出されるところに，本書の特長があるといえるだろう。

(2) セドラチェクの人物紹介

本論に入る前に，対談の両者について補足しておきたい。トーマス・セドラチェクは1977年生まれのチェコの経済学者であり，大学在学中から大統領の経済アドバイザーを務めた経歴をもつ俊英である。大学での研究，教育にも携わっており，研究者としての傑出した代表作である『善と悪の経済学』（原著2011，村井章子訳，東洋経済新報社，2015）は世界中で翻訳され，若くして国際的に名の知られた学者となっている。経済政策アドバイザーとしての実務家的な顔とは別に，この著作では，主流の経済学の方法論や思想を根本的に批判する哲学的な議論を展開している。その核心は，経済学が価値中立的な学問を目指そうとしてホモエコノミクスの仮定と数学の応用によって組み立てられることで，人間らしさを失ったものになっているという批判である。タイトルにもある「善と悪」というのは，人間が神話や宗教の形態で社会の経済的事象について語ってきた歴史上，常に根幹にあるものだった。倫理と経済は切り離されて考えられてこなかったのである。ところが，現代の経済学は，倫理を扱わないことで中立的

な科学となれるという偏見の下，歪な人間像と社会観をつくり出してしまっている。人類の経済的規範を古代からたどったうえで，そうした規範的議論を経済学に取り戻すべきだというのが，彼の主張である。経済学も一つの神話であり物語であるとして，過去の神話や寓話と同列に論じることによって，経済学がもつ規範や世界観を暴く手さばきは実に鮮やかであり，核心をついた経済学批判となっているといえる。

ところで，この議論にはチェコの時代的背景の影響もあることを指摘しておかなくてはならない。彼がアドバイザーとしてついた大統領は，チェコ共和国の初代大統領ヴァーツラフ・ハヴェルであり，ソ連下の体制に抵抗し，ビロード革命（共産党政権打倒）の中心を担った人物であった。彼の下で，1990年代に，この国は新しい体制を築き，共産主義から自由主義へという急激な社会の転換が進められたのであった。セドラチェクは2001年から2003年にかけて，彼のアドバイザーを務めていた。この時代状況の中で，経済学といえばマルクス経済学ではなく，新古典派経済学でありケインズ経済学であるというのがコモンセンスだったと考えられるが，そうした影響もあって，彼の議論でマルクス経済学の登場頻度は少なく，登場しても主流派と同様の批判対象としてでしかない。マルクス経済学への理解にはやや物足りなさを覚えるものの，この環境を考慮すると，ソ連の体制と結びつけて切り捨てるような扱いをしていないだけ，むしろ評価すべきとも思われる。他方で，自由主義化の流れのなかで，礼賛されがちな新古典派経済学を，哲学的な次元から批判する姿勢には，学問的な誠実さが表れていると評価できるだろう。彼はこうして新古典派にもマルクス派にも依らずに，倫理的な経済学を再興することを訴える立場をとっている。

(3) グレーバーの人物紹介

次に，デヴィッド・グレーバーは1961年生まれのアメリカの文化人類学者である。2020年に若くして急逝したものの，非常に多作な研究者であり，『負債論』（原著2011，酒井隆史監訳，以文社，2016）や『ブルシット・ジ

ョブ』（原著2018，酒井隆史他訳，岩波書店，2020）などの話題作で世界的に名が知られている。また，彼はアナーキスト活動家としても有名であり，『デモクラシー•プロジェクト』（原著2013，木下ちがや他訳，航思社，2015）など，社会運動に関わる著作も著している。彼は，反グローバリズムの抗議活動を行うグローバル・ジャスティス運動[3]の中心的な人物であったほか，2011年にはオキュパイ運動にも積極的に関わった。彼の文化人類学研究とアナーキストとしての活動ははっきりと結びついている。それは文化人類学が人間社会の様々な形態を探求するものであり，そこに現れる証拠からは，人間が国家や政府なしでも共同生活をうまく営めることが分かるためである。彼はアナーキスト人類学を提唱し，現存の国家制度とはまったく別の社会のあり方を想像する視点を提示しようとしていた[4]。彼の議論が扱うテーマは非常に幅広い。負債や貨幣，官僚制，民主主義など，一貫性が見つけにくいほどである。しかし，これらに通底しているのは，現代社会において常識として定着している制度が，人類史的にみるとまったく普遍的なものではなく，また現在の制度の方が一方的に優れているとはいえないということを示すものであることである。こうして，資本主義経済を支える貨幣や負債に対する認識や，資本主義の効率性に対する通念を揺るがし，現存の制度とは違う制度の可能性に誘うものとなっている。彼の議論はともすれば人間の可能性を楽観的に考えすぎているようにも見えるが，非常にラディカルな将来の社会を構想している点で興味深い議論が多い。

3）新自由主義的グローバリゼーションに対抗する様々な運動が国際的に緩やかに連帯した運動。労働運動や農民運動や環境保護運動など，多様な運動から成り立っている。1999年にシアトルで開かれたWTO閣僚会合に対して大規模な抗議を行って，会合を決裂に追い込んだことで注目された。

4）『アナーキスト人類学のための断章』（Graeber［2004］）において，いまだ存在しないものの，アナーキスト人類学が存在可能である理由や，そこにどんな教義が含まれるかについて論じられている。

本書の企画は，このように出自も世代も研究分野も違う二人が，資本主義経済のシステム的問題について意見を交わすものである。本稿ではその一端である，資本主義批判，経済学批判，変革のイメージについて，語られていることを取り上げる。

2．資本主義システム批判

(1) 資本主義システムの非人間性

セドラチェク（以下，TS）「市場は自分の命を得ました。それはもはや私たちに尽くすのではなく，私たちが市場に尽くすのです。」（59頁）（『改革か革命か』からの引用ページ番号は，以下同様に番号のみ記載する）

セドラチェクはこう述べ，市場という制度が当初の役割を反転させ，人間を支配するようになっていることを指摘する。グレーバーも同意し，人間の生活を支えるために市場があるのではなく，市場経済がうまく機能するために人間が働かなくてはならないという関係へと逆転し，市場の規律が人々の間に浸透していることを指摘する。こうした点で，このシステムは非人間的なシステムだと論じられる。それは人間の魂をもたずに，増殖のために増殖を図るシステムだという意味で，ゾンビになぞらえられている。両者のシステム批判の根幹は，この市場の非人間性にある。

では，このシステムはどのようにして誕生したのだろうか。グレーバーはこの非人間性が，負債と貨幣によって生み出されたと論じる。

グレーバー（以下，DG）「負債は経済人となるように強い，すべてをある種の合理的計算に服従させます。」（78頁）

DG「負債は，ほとんどすべての暴力的な構造的不平等の関係をつくり出すこれまででもっとも効果的な手段となるとともに，不平等をモラル化し，まるで犠牲者のせいであるかのようにみせかけるのです。」（83

頁）

ここでグレーバーは，負債が形成する規範に注目している。セドラチェクが「はじめは人間が主体，負債が客体……でも，それを誤用あるいは濫用してしまえば，自身の負債の奴隷となってしまいます。……過剰な自由によって私たちは奴隷になるのです。」（79頁）と述べるのに対し，グレーバーはそれこそが「負債のイデオロギー」だと論じる。すなわち，債務者は自由意思によって負債を抱えたのだから，返済のために奴隷状態になっても当然であるという思考が，揺るぎない規範意識となっているのである。実際に負債を抱えた人々は，不運な出来事に襲われただけという場合も多いのであるが，負債の規範によって，そういう事情とは無関係に，返済することが最優先のモラルとされ，暴力的な取り立てすら容認されるのである。これは負債が生じたコンテキストから負債の清算が切り離されることだといえる。こうした扱いができるがゆえに，負債が効率的に活用できるわけだが，生身の人間の生活は負債に服従させられるしかない。ここに負債が重要な役割をもつ市場システムの非人間性が現れるのである。

そして，同じことが貨幣の存在についてもいえる。貨幣は商品や負債を価格表示することで，数字化する機能をもつものである。そして数字化することは，コンテキストを剥ぎ取ることを意味する。商品の生産や負債の原因についての物語は価格からは排除されるためである。これが効率的な取引を可能にするとともに，人間の非人間的な扱われ方を生む原因ともなるのである。両者は次のように論じる。

DG「私たちが数字に頼ってきたのは，数字は信頼や透明性，アカウンタビリティといった必要とされる問題を扱わないで済むようにしてくれるからです。」（86頁）

TS「実際，これは人々を奴隷，あるいは債務奴隷にする唯一の方法で，ナイフで切りつけて，途方もない暴力を使って，社会的なコンテキストを剥ぎ取ることによってそうするのです。……これは他の人間を非人間として扱う唯一の方法です。数字を利用するのです。」（88頁）

そして，こうした帰結をもたらす貨幣は自然発生的に誕生したのではないとグレーバーは述べる。

DG「このモラルにかかわるプロジェクトによって，ただ店に入って，知らない誰かにいくらかのトークンを渡し，欲しかったものをもって店を出るということが可能な状況がつくりだされたのだと思います。……これは特殊な時代の特殊な社会階級のためのごく特殊なモラルにかかわるプロジェクトだと思います。そしてこれが目下，世界を席巻しているのです。」（93頁）

貨幣によって人々を数字化しコンテキストから引き剥がすことは「モラルにかかわるプロジェクト」の結果だという。『負債論』でグレーバーは，人間の基本的な経済関係の一つとして交換をあげるが，それは市場での貨幣を用いた等価交換を典型とするものではない。典型は，贈与とそれによって発生した負債の返済の連続である。負債は等価で返済されずに，多いか少ないかの返済が行われることで，常にどちらかに負債が残るようにされ，それが人間関係を持続させる機能を果たす[5)]。これが負債のモラルだったのである。負債にはコンテキストがあり，それは人間同士のつながりを示すものであった。しかし，「モラルにかかわるプロジェクト」は，負債

5）グレーバーは『負債論』第5章で，経済的諸関係のモラルとして，コミュニズム，交換，ヒエラルキーの３つを提示する。コミュニズムは，日常的な協働作業の場において，人々は何の見返りも求めることなくできる人ができることをしているという事実を指している。資本主義社会であろうが，このような「基盤的コミュニズム」が根本的に人間社会を支えていると指摘される。これに対し，相互的な期待や責任を含む関係が交換である。この典型は贈与の応酬である。ここでは贈与を受けた側が負債を負うことになり，その等価物を返礼として贈れば，負債の帳消しも原理的には可能である。しかし，人類学が示すように，隣人との贈与の互酬関係は，負債を帳消しにする形を取らないことが多い。絶えず負債の返済の形で贈与が継続されることが人間関係を保ち，社会を維持することにつながるのである。グレーバーは市場での単発の等価交換に対して，別のカテゴリーを定めてはいないが，それは継続的な人間関係を伴わない形式の交換の変種として，贈与と地続きのものと捉えられているためであろう。最後に，ヒエラルキーは優劣がはっきりした社会関係における義務や恩恵のことを指す。ここには互酬性はなく，先例にしたがって慣習化された一方的な贈与の形態となるとされる。以上３つのモラルが，社会関係に応じて絡み合っている姿が，グレーバーが見いだした人間社会の基本的な姿であった。

の意味を一変させた。貨幣によって負債が数字化され，コンテキストを度外視して，等価の返済を強制できるものへと変わったのである。これは，従来の延長線上には出てこない変化であり，経済法則とは別の原因で生じている。それが「特殊な社会階級」によるモラルの改変プロジェクトであり，政治によるイデオロギーの改変なのである[6)]。

グレーバーの資本主義システム批判の観点は，このようにイデオロギーやモラルによって，人間を非人間的に扱う規範によって機能していることに向けられている。負債と貨幣がその機能を支えているのであるが，それは自然発生的で不可避なものではなく，階級利害を反映した政治の働きによって生み出されたものであることを強調する。

DG「私は完全に確信していますが，つねに延び続ける労働時間と労働の劣悪さは，本当は経済が命じるものではなく，政治が命じるものなのです。それは仕事のこと以外，何も考えられない人間の集団をつくり出す方法であり，そういった人間は仕事のことをあれこれ心配しているか，ずっと働いているかのどちらかです。」（61頁）

ここでも述べられているように，政治が資本主義システムの非人間性を持続させている。市場が本来の想定とは逆に人間を支配するようになっているのは政治的な帰結だということが，グレーバーの主張である。

(2) 資本主義システムの非効率性

以上のような，システムがつくり出す非人間性は，それと引き換えに豊かさをもたらすものだとして正当化される場合がある。貨幣による数字化は，明らかに取引の効率化に影響を与えているであろう。しかし，そうし

6）グレーバーは資本主義システムの特殊性として，貨幣による負債の数字化によるコンテキストの剥奪があることを強調する。これは貨幣や負債が歴史的には古くからあるものでありながら，それが機能するにあたってのモラルの変容が独特の社会システムを生み出していることを示す独特の視点として，有意義であろう。ただし，前近代の負債にまつわるコンテキストが人身を直接的に支配するグロテスクな機能を果たした側面や，コンテキストを引き剥がすことが，一面ではそこからの解放であった側面については強調されていないため，それを補って議論を評価する必要があるだろう。

たメリットが十分に大きいものなのかについて，両者はそれぞれ異議を唱える。

セドラチェクは，「市場は端っこでは崩れます」（37頁）と述べ，個人間の関係などのナノレベルや，国家規模のマクロレベルの領域では，市場のルールは適用されないことを指摘する。親密圏では人々は等価交換的なものを隠そうとするし，国家や大企業が破綻しそうになったときにはルールの適用は回避される。市場は中間の領域でしか機能しないという点で，まず普遍性をもつシステムではない。そして，その方が望ましいという。

TS「（市場がナノレベルでもマクロレベルでも機能しない―あるいは機能すべきではない―というのですか？）機能しないほうがより効率的で，より望ましい。これが私の主張です。システムのいくつか，もしかしたらほとんどすべてのシステムは，それが不効率なときのほうがより効率的です。」（39頁）

セドラチェクは，市場原理が隅々にまで行き渡るほど経済社会は効率的になるという通念を，ここで否定している。そんなことをすれば，人間関係は壊れ，国家は破綻する。効率的どころか経済の基盤を破壊することになるのである。グレーバーも同意したうえで，資本主義はそうした不完全な市場に寄生しており，マクロレベルでの市場の論理を制限するような政治的権威と組むことによって貨幣の増殖に勤しんでいるとして，政治の機能との接点を示している（43頁）。

また，グレーバーは現代の資本主義が官僚制にある種の市場の論理がもち込まれたことで，創造性が失われるものになっていると指摘する。創造性の源泉となる研究に，企業的な競争のエートスがもち込まれ，何を発明しようとしているのかを証明して資金を獲得するという手続きが膨大に必要になり，その書類作成に時間を奪われることで，結果的に発明を停滞させているのである（40頁）[7]。市場は効率的な世界をつくるとは限らず，こ

7）『官僚制のユートピア』（Graeber［2015］）2章で，このテーマが論じられている。

の例ではブルシット・ジョブを量産している[8)]。市場原理の拡大を生産性の上昇によって正当化する論理は成り立たないのである。

(3) 資本主義システムの存続要因

だとすれば，市場システムはなぜ存続するのだろうか。非人間的なシステムを破棄することは，なぜできないのだろうか。セドラチェクが述べたように「命を得た」市場が人間を支配するという構図は，マルクスの表現を使えば「疎外」であり，グレーバーはまさに市場はその典型例だと述べている。

DG「これまで話してきたような非人格的なメカニズムが創造されたということで，システムを動かしている人々ですらこのメカニズムの規律に従っているのです。……こうしたシステムをつくった人々は多くの点で，いちばんシステムに強制されているのです。」（102頁）

グレーバーは例として，企業のCEOがブッシュ大統領に書いた手紙をあげている（102頁）。それは，ボランタリーな方策による地球温暖化の解決は私たちCEOにはできないため，政府に排出量などの規制を求めるというものだった。つまり，システムを動かしているはずのCEOたちですら，自分で自分を止められないということである。上述したように，グレーバーは政治がこの構造を作っているというのだが，それは権力者が恣意的に決定できるという意味ではない。ルールや規範を作る政治もシステムの内部にあり，非人間的なシステムを持続させる一機構でしかないのである。そして，この命をもってしまったシステムの大きな原動力の一つとなっているのが，主流の経済学だと論じられる。

---

8)「ブルシット・ジョブ」をグレーバーはこう定義している。「ブルシット・ジョブとは，被雇用者本人でさえ，その存在を正当化しがたいほど，完璧に無意味で，不必要で，有害でもある有償の雇用の形態である。とはいえ，その雇用条件の一環として，本人は，そうではないと取り繕わなければならないように感じている」（Graeber［2018］，p.9，27頁）。本書で，グレーバーはこのような存在しない方が望ましい労働が，現代社会では半分近くを占めると論じている。

３．経済学批判

セドラチェクは，資本主義システムが非人間的なものになっている一因として，経済学が物理学のように価値中立的な科学を目指そうとしていることがあると指摘する。そうした経済学は，経済をまさに非人間的なシステムとして捉えようとし，経済はそう動くべきだという規範を形成する。その中核にある概念が，ホモエコノミクス（経済人）であり，合理性である。合理的に効用最大化を図る人間が市場で出会って取引をすることで，最適な状態が実現するというのが，導かれる結論である。しかし，この命題は無内容であるとセドラチェクは批判する。

TS「最大化定理，すなわちすべての人が自分の効用を最大化するという経済学の神聖なる原理は，実際にはトートロジーなのです。最大化しているものは何でしょう？　もし死後の効用までそれに含めれば，それが本当に意味するところは「人々はしたいことをする。時に理由はなくても」ということにすぎません。」（65頁）

何を食べようが，どんな仕事に就こうが，犯罪に手を染めようが，どれも本人の主観的な効用を最大化した結果だと述べることにどんな意味があるだろうか。効用最大化の法則とは，人々のあらゆる行動について，効用を最大化していると呼ぶにすぎないものであって，行動の説明にはならないのである[9)]。

もちろん，演繹的な論理体系を構築するにあたって必要な仮定として，ホモエコノミクスという概念をつくること自体は否定されるものではないだろう。しかし，それが非現実的な仮定であるということを忘れて，人間はホモエコノミクスとして振舞うべきだと主張し始めると，それは規範をつくることになる。経済学はこれを行っているのであり，それが現在のイデオロギーを形成している。ホモエコノミクスは実在の人間とは程遠い。

9）この論点は，Sedlacek［2011］，pp.223-226, 317-322頁で展開されている。

しかし，それによって動かされる市場こそが，模範的な市場だとされるのである。

現在の経済学は，かつての神話のような役割を果たしている。物語を通じて，社会の規範を示す役割である。セドラチェクはこう述べる。

TS「神話のすばらしい定義があります。「決して起こったことのないことでありながら，つねに起こっていること」というものです。市場の見えざる手，完全合理性，私たちはそんなものを現実の生活ではみたことがありません。経済人にだれも会ったことはないのに，みんながそうだと言うのです。」（66頁）

神話は必ずしも科学に劣らないかもしれないし，現代科学も神話との共通点はあるだろう。問題は，経済学が神話のようであることではなく，どんな神話なのかである。人間はホモエコノミクスであるべしと説く神話は，市場システムを非人間的なものにし，持続不可能にする元凶となるのではないか。それがセドラチェクの批判である。

この議論にグレーバーも賛同する。

DG「合理性の上に社会を築くというのは無意味です。それはまるで，釘だけでできた家を建てるようなものです。釘は何をつないでいるのでしょう？　合理的なシステムについて語るということは，真の問題をすべて避けているのです。」（65頁）

ここでグレーバーは合理性だけを原理としている経済学は，社会の理論たりえないと述べている。グレーバーは合理性という概念そのものに懐疑的である。全体としての人間の思考のうち，一部を合理性として切り出すことによって，それ以外を非合理性の範疇におくという，人為的な区分によってこの概念がつくり出されたからである。生身の人間は合理性だけで説明できる行動をとらないのであるから，合理性だけで組立てられた理論では，現実の人間も社会も説明できるはずはないのである[10)]。

10）DG「次のものは経済学部の一年次の標準的な練習問題です。「慈善活動をする人についてどう考えますか？　彼らはいい人だと認識されることによる喜びを最大化しようとしているの

このように，主流の経済学は意図的に非人間的なシステムを扱う理論となっており，それが単なる論理的命題を示すだけでなく，現実がこの理論通りになるべきだとする規範を形成している。そしてこれが資本主義システムを実際に非人間的なものにする役割を果たしているのである。したがって，非人間的なシステムを改めるためには，経済学を改めることも必要となる。これが，この対談で導かれた一つの結論である。

4．変革のイメージ

現在の持続不可能なシステムに代わって，何を構想するかについて，セドラチェクとグレーバーの主張は異なっている。セドラチェクの例えでは，現在のシステムはゾンビであるが，それに魂を取り戻せると考えるセドラチェクに対して，グレーバーはゾンビを殺せばよいと主張する（17頁）。すなわち，セドラチェクは資本主義を修正することで，人間的な魂をシステムに取り戻せると考えるのに対し，グレーバーはまったく新しいシステムを構築すればよいという立場である。

(1) グレーバーの「革命」

この両者の比較においては，ラディカルな立場のグレーバーの方が主張が明確である。彼は，資本主義システムは崩壊しつつありながら，オルタナティヴシステムが見つからないために，ゾンビ化して持続していると考える。そこで彼は既存の制度内での改革を考えるのではなく，新しいシステムの構想と実践の意義を強調する。オキュパイ運動の性格を，彼はこう述べる。

DG「私たちが提供するのはビジョンです。提供しないのは，政策的な提

です」。もちろん，なぜ，人々はそれで快感を得るのかという問いには彼らは答えられません。それに対する彼らの答えは，「うん，心理学者に聞いて」というものです。合理性は何も教えないのです。」（65頁）

案です。政策的な提案というのは特定の制度的構造のなかでだけ実現できるものですが，まさにその制度的構造に対して私たちはオルタナティブを提示しようとしているのです。」（123頁）

オキュパイ運動は，政策を要求したのではなく，別のシステムの社会は可能であることを，実践的に示すものであった。それが直接民主主義や相互扶助の原則によって運営される社会である。

DG「直接民主主義の実践をしているところでは，人々は相互扶助の文脈で行動します。これはグローバル・ジャスティス運動にまでさかのぼります。そこで私たちはWTOやIMFのような機関の民主主義的には無責任な性格を際立たせるために，直接民主主義を実践したのです。そして，それをもっと掘り下げて，それらの機関が行っているような行為は決して人間性の本質ではないということを身をもって示し，それらの機関を暴露し，正当性をはぎ取ろうとしたのです。」（32頁）

資本主義システムは，人間性の本質を利己的なものと捉え，利益に基づいてしか人間は動かないという想定の下で成り立っている。しかし，それは人間の本質を誤って捉えており，その人間観を改めれば，新しい社会は構想できるのである。直接民主主義の実践はそれを証明するための一段階であった。国家や市場の制度の枠外に出ることで，本来の人間性がより発揮できる社会が可能になるというのがグレーバーの展望である。

DG「社会的，政治的，技術的想像力がこのように崩壊してしまった理由は，まさに不安定さが生み出す予測のできない状態のためで，この広範なカオスの感覚は，今ある市場の諸制度によって養われたものです。その結果生じたのは驚くべき均質性であり，より大きな次元でリスクをとろうという姿勢の欠如です。私が望むのはそれと正反対の状態です。人々のベーシックなニーズが完全に保証されていて，別のレベルでカオス的に，想像力を発揮して行動する余裕があるような社会をみたいのです。」（140頁）

ここで述べられているのは，ゾンビ化した資本主義が均質化して創造性

を失っていることである。これは中間層の解体とも関係するが，不安定さが増大したことで，リスクをとった創造的な活動ができなくなっていることが指摘されている。そして，グレーバーがオルタナティヴ社会として目指す像が，ベーシックニーズにおける不安定さの解消にあることが分かる[11)]。そうすれば，人間は想像力を発揮して，活気ある社会が実現できるだろうと考えるのである。これが直接民主主義的な共同体の政治システムとどう結びつくのかは述べられていないが，小さな共同体の内部での相互扶助が基盤となるというイメージだと考えられる。そして，これは十分に可能だと考えられているのである。

(2) セドラチェクの「改革」

一方で，セドラチェクは，現代の危機的なシステムに対する変革の方策を提出することはしていない。むしろ，ラディカルなグレーバーの提案に対して，システムを破壊しなくても，修正資本主義で乗り切ろうと考えるのが自分の立場だと述べている。これは東西の狭間でシステムの破壊を体験した者ならではの，カオスへの恐れが背景にあるだろう。とはいえ，現状のシステムの持続不可能性は彼も認めるところである。それに対処すべく彼が必要性を強調するのは，現代のシステムの一角をなしている経済学の改革である。

TS「ある意味で科学，そして宗教の役割とはシステム化することです。つまりカオスを減らし，脱神話化することです。それがちょっと行きすぎたのではないかと私は思います。私たちは，すくなくとも経済学者は……自分たちはカオスをコントロールできている，と考えているのではないかと思います。……私たちはその仕組みを完全に理解していない車を運転しているのであり，だからもうちょっと気をつけて運転すべきだし，もうすこしゆっくり運転すべきだということをまだ認

11）グレーバーは『ブルシット・ジョブ』の最後で普遍的ベーシックインカムへの支持を表明している（Graeber［2018］，pp.269-285, 345-364頁）。

められないのです。」（142頁）

現代の主流の経済学は，ホモエコノミクスの前提と数式によって，経済システムを知り尽くした気になっている。市場原理がうまく機能すれば望ましい状態が実現するというモデルを示し，それに現実を合わせようとする政策を進めてきた末に，世界金融危機を招いたのである。これはモデルと現実を混同した誤りによる。人間社会において市場原理は決して普遍的には通用しないし，ホモエコノミクスの行動原理も普遍的ではない。極端な人間像に基づいた経済学のモデルに人間を従わせようとするのではなく，より人間の本質に忠実な前提から経済学を構築することが，持続可能な経済システムを作ることにつながるだろうというのが，彼の主張である。

TS「（新しいシステムでは）人間というものをもっと再生することです。私たちはここから離れ，経済をコンテキストから引き離してしまいました。後の祭りですが，これは全くバカげたことだと気づきました。すこしだけ再生して，精確さをすこしだけ減らして，世界はそのように動くものではないということをもっと理解することです。」（157頁）

ここで述べられている経済学の改革には，人間および人間社会の本質の理解が不可欠であり，文化人類学の知見が必要とされる。両者はこの点で結びつくことになる。セドラチェクは経済システムの変革の面では消極的にも見えるが，経済学の改革の面ではラディカルである。ホモエコノミクスを否定した人間像から生み出される経済学は，現実のシステムを変える力も持ちうるだろう。その意味では，グレーバーと向いている方向は同じだといえるだろう。

おわりに

本稿では，グレーバーとセドラチェクの資本主義システム批判をみてきた。彼らの議論の特徴は，このシステムが狭い意味での経済領域を超えたものとして捉えられていることである。資本主義システムは市場があれば

できあがるものではない。市場はひとりでには機能しないため，それを機能させるためには，政治の力やイデオロギーの力が必要になる。負債と貨幣によって，市場に適合的な個人がつくり出され，暴力による強制を背景に，市場は自律的に働くことができるようになる。そしてこれをイデオロギー的に正当化しているのが主流の経済学である。その理論では，ホモエコノミクスによって構成される市場が，規範として追求すべきものとされるようになっている。この一連のシステムが，現代の資本主義である。そして，批判の核心は，この中核にホモエコノミクスがあるために，このシステムは非人間的なものになっているということである。個人化され，コンテキストを剥ぎ取られ，合理性のみによって動く人間のモデルが，システムに存在すべき理想の人間像となっている。この生身の人間とかけ離れたモデルに，現実の経済を合わせることは無謀なプロジェクトなのである。実際に，市場はミクロの親密圏やマクロの国家レベルでは機能しないが，むしろそれゆえにシステムは崩壊を免れてきた。しかし，経済学のイデオロギーの要請は市場のさらなる普遍化である。この方向性に持続可能性がないのは明らかであろう。

現行のシステムに対するビジョンは，両者で一致していないものの，この経済システムを変えるには，政治やイデオロギー，そして経済学の転換が必要であり，その際にホモエコノミクスに変わる生身の人間像を基盤としなくてはならないという点では，両者は一致している。経済学と人類学はもっと接近すべきだということが，一つの積極的な結論となろう。もちろん，新しい経済学がどのような体系的理論になるべきかは難しい課題である。しかし，両者が示した方向性はその必要条件を示したものとして，評価できるだろう。この議論が政治経済学の発展の一助となることを期待したい。

〈参考文献〉

Graeber, D., *Fragments of an Anarchist Anthropology*, University of Chicago Press, 2004（高祖岩三郎訳『アナーキスト人類学のための断章』以文社，2006）

Graeber, D., *Debt: The First 5000 Years,* 2011=2014（酒井隆史監訳『負債論―貨幣と暴力の5000年』以文社，2016）

Greaber, D., *The Democracy Project: A History, A Crisis, A Movement,* Spiegel & Crau, 2013（木下ちがや他訳『デモクラシー・プロジェクト―オキュパイ運動・直接民主主義・集合的想像力』航思社，2015）

Graeber, D., *The Utopia of Rules: On Technology, Stupidity, and the Secret Joy of Bureaucracy*, Melville House, 2015（酒井隆史訳『官僚制のユートピア―テクノロジー，構造的愚かさ，リベラリズムの鉄則』以文社，2017）

Graeber, D., *Bullshit Jobs: A Theory,* Simon & Schuster, 2018（酒井隆史他訳『ブルシット・ジョブ―クソどうでもいい仕事の理論』岩波書店，2020）

Sedlacek, T., *Economics of Good and Evil,* Oxford University Press, 2011（村井章子訳『善と悪の経済学』東洋経済新報社，2015）

Sedlacek, T. & Tanzer, O., *Lilith und die Dämonen des Kapitals. Die Ökonomie auf Freuds Couch,* Carl Hanser Verlag, 2015（森内薫他訳『続・善と悪の経済学　資本主義の精神分析』東洋経済新報社，2018）

Sedlacek, T. & Graeber, D. *(R)evolutionary Economics,* unpublished（三崎和志他訳『改革か革命か』以文社，2020）

新井田智幸「デヴィッド・グレーバーの世界―人間に寄り添った，常識の破壊者」『唯物論研究年誌』第26号，大月書店，2021

Critical Views against Capitalism in Sedlacek & Graeber's *(R)evolutionary Economics*

Tomoyuki NIIDA

《Abstract》

In a dialogue on *(R)evolutionary Economics,* Tomas Sedlacek and David Graeber discuss the problems of the capitalist system. The core of their argument is that this system is inhuman, meaning that economic activity does not exist for humans, but on the contrary humans live for the economic system or market. On the fundamental basis of this, there is the ideology which states that societies should be managed by the rational market, according to which humans are numeralized by debt and money. Mainstream economics also maintains and reproduces this system according to the theory which relies on *homo economicus*. On critiques of the capitalist system, they basically approve of each other, but their opinions differ on what capitalism should change. Graeber insists on radical changes or rebuilding capitalism with alternative new systems. From his experiences gained through fieldwork during anthropological inquiry and various political actions as a famous anarchist activist, he believes that a society based on direct democracy and mutual aid is possible. On the other hand, Sedlacek insists on gradual changes or a reform of the current system. He focuses on the problems of the dogmas of mainstream economics and makes appeals for the importance of reforming economics such that it is based on a more human perspective.